

国際学会報告

第十回国際中世哲学会報告

加藤 信 朗
加藤 雅 人

第十回国際中世哲学会 (The Tenth International Congress of Medieval Philosophy) は 1997 年 8 月 25 日から 30 日までエアフルト (Erfurt) で開催された。

学会が中世ドイツの古都、ルネッサンス人文主義のアルプス以北の拠点、宗教改革の発起点、東西ドイツの分裂後は東独領内にあったエアフルトで開かれたことが今回の学会を特徴づけている。エアフルトはドイツ宣教の司教のポニファチウスが最初にその司教杖を留めた街であり (724年)、中世ドイツでは代表的な大学街でありつづけた。エックハルトはここに滞在し、説教した。ルネッサンス人文主義が興隆するに至ってこの地はアルプス以北の人文主義運動の拠点の一つとなった。メランヒトン、ルターなどが集ったでもあろう人文主義者の集会所跡がいまも傾きかかったゴート風の街並みを残す旧市内にある。ルターはこの大学で学び、この地のアウグスティヌス会修道院で生活した。ルターが初めて説教した教会堂が同じ旧市内の大学構内にある。人文主義者であった 15 世紀の医者アンブロニウスが個人で収集した写本蔵書 (Bibliotheca Amploniana) は科学文献の写本集成としてドイツ随一を誇り、街の宝となっている (学会期間中はその閲覧、研究が許されていた)。ルターの聖書研究の端緒はそこに置かれており、宗教改革の烽火がここから上げられた。しかし、ナポレオン戦争時、由緒ある大学はナポレオンによって閉鎖された。また東西分裂後の戦後ドイツではドイツ民主共和国 (DDR) の範囲内にあったこの地では中世哲学研究は当然のことながら圧服されていた。この状況下で、中世哲学研究の火を保とうと努めた Fritz Hoffmann 教授が不自由な足を他人に助けられて個別研究発表会場にあてられた一教会堂の講壇に立ち研究発表なされた姿は痛ましく、列席者の心を打った。エアフルト大学が再建されたのはやっと数年前のことであり、この新設の大学を助けて今回の学会を企画、組織した主な人々はケルンのトマス研究所のメンバー (Jan A. Aertsen, Andreas Speer) とボン大学の中世哲学研究のメンバー (Wolfgang Kluxen, Ludger

Honnfelder) であった。

このようにして、まだ整わないままで始めることから起こる運営上の困難が種々の点で目にとまったが、他方では、未来に向かう新進の息吹が感じられた。つまり、今回の学会は統一ドイツがその面目をかけ、旧東独圏内に中世哲学研究の拠点を築こうとして組織した意欲的な試みだったのである。

全体集会はルターが修道生活を送ったアウグスティヌス会修道院の由緒ある礼拝堂内で行われ（内陣にはアウグスティヌスの生涯の各場面を写した 14 世紀の著名な一連のステンドグラスがある）、個別研究は司教座聖堂に近い崖面に建てられた哲学研究所内の各室を中心にして、周囲の神学院、教会堂、集会所など計 12 箇所で行われた。参加者は徒歩で 30 分とはかからない旧市城壁内の各所に散在する発表会場をたずねて歩きまわった。こうして、わたしたちは中世ドイツ、ルネッサンス、そして再統一後のドイツという、ヨーロッパ史をよぎる三つの大きな時代枠の真っ直中にそのままほうり込まれる感じで、学会期間中、異常な興奮に包まれた。

ここで、やや個人的な感懐を申し述べることになるが、わたし自身は 1962 年のケルン、1977 年のボン、そして今回 1997 年のエアフルトと、ドイツで行われた三回の国際中世哲学会に、そしてドイツで行われたすべての国際中世哲学会に参加したことになる。それぞれ 15 年、20 年を隔てて、同じドイツで行われた三回の国際中世哲学会は、参加者の顔ぶれ、発表のテーマ、内容の移り変りにおいて、60 年代から今日に至る 40 年間の中世哲学研究の変遷を如実に反映している。前二回と比べて今回を特徴づけていたことが何であるかと言えば、それは、中世哲学研究がいまや広く一般の哲学者の関心の重点になったということだろう。60 年代では中世哲学研究はまだ聖職者を中心とする研究だった。しかし、いまやそれは聖職者を含む一般の研究者の共同の関心事になっている。「中世における哲学とは何か (Was ist Philosophie im Mittelalter)」という本大会の統一テーマはこの関心を示すものである。

40 数箇国から 700 人に及ぶ参加者があったということも驚きであるが、わが国から 15 名が参加し、7 名が研究発表したことはわが国における中世哲学研究の進展を物語る画期的な成果である。

全体会議で最初に講演したのはボン大学の W. クルクセン教授だった。趣旨はおおまかに言えば、ヨーロッパの Identity の基礎は中世哲学または中世哲学研究にあるということである。これは EU の理念を代弁するドイツの哲学者の言葉であると言え

るだろう。興味深かったのは、その場で質問に立った人々が東方教会、イスラム圏、ユダヤ圏というように、すべて東の声を代弁する人々だったということである。朝食の席で、教授と同席した折り、そのことに触れると、「そう、ポーランドもルーマニアもかつては東だった、しかし、今はわれわれと同じ（＝西）だ。」という答が返ってきた。そこで、この（西）ヨーロッパ中心主義の根強さにただただ驚き入っているわたしに、ルーヴアン大学のスティール教授が笑いかけてきて「クルクセンさんには、アーヘンがヨーロッパの中心、世界の中心なんですよ。」と口を挟み、一同なごやかな笑いとなった。

全体会議の掉尾にはエール大学の神学教授、M. アダムス教授が講演した。オッカム学者として著名なアダムス教授は同時に長老派の女性牧師でもある。アダムス牧師は牧師の衣裳に身を包み、アウグスティヌス会修道院の礼拝堂に高くしつらえらえた説教壇に昇って講演した。趣旨は、プロテスタント神学が中世神学を敵視ないし無視してきたのは間違いである、アンセルムスからアクィナス、ドゥッス・スコトッスを経てオッカムに至る神学思想のうちに、現代神学がそこから生命を汲むべき豊かな源泉があるとするものである。都合で私はこの観物に立ち会うことができなかったが、教授の来日の折りひととき交わしえた discussion 以来、教授の真摯な研究態度を大切にするものの一人として、教授の発言を貴重なものとすると同時に、時代の移り行き大きさに打たれるのである。

(加藤信朗)

今大会の統一テーマ「中世において哲学とは何であるのか？」との関連で中心的な位置をしめると思われるのが、「1277年の非難宣告の意味と哲学の地位」と題して第二日目の火曜日（26.08.98）の午前中に行われた全体会議である。Alain de Libera, Luca Bianchi, John E. Murdoch の各氏の報告に続いて活発な質疑が行われた。周知のように、1270年から1277年にかけてパリ大学で禁令を破って教授されていた哲学的・神学的諸命題が、ついにはタンピエによる219項目の非難宣告という形で決着した。de Libera氏によれば、この宣告についての現代の諸研究の成果は次の三つに集約できる。(1) 検閲官タンピエの言論においてまた彼の言論によって構築された「哲学」像を確定すること。(2) その論理の偶然性を明らかにすること、すなわち史家たちの伝統的仮説に反して、タンピエの諮問委員会の首尾非一貫性や場当たりの論